

次世代型の運営管理で省力化

# 保守点検に最新計測車

新たに導入する「インフラドクター」の計測車両。最新技術の導入で業務の効率化を進めている15月中旬、静岡空港

次世代型空港の運営管理手法を構築しようと、富士山静岡空港株式会社は保守点検作業への最新技術導入に力を入れている。業務の効率化を進めて人手不足の解消を図り、自立した空港運営を目指す。

導入するのは、首都高技術(東京都)が開発した道路保守管理システム「インフラドクター」。カメラやレーザースキャナを搭載した計測車両を走行させ、滑走路や駐機場の3次元点群データを取得する。路面の勾配や、



ひび割れなどの損傷の調査を同時に行い高精度のデータを一元管理することが可能で、大幅な省力化が期待できるという。2月下旬に計測作業を行い、現在は取得したデータを解析している。2020年3月までを実証実験の期間とし、本格導入に向けて有用性を検証する。静岡空港株式会社の担当者は「人材不足は今後間違いなく起る。効率的で付加価値の高い取り組みを進め、ほかの空港のモデルになりたい」と力を込める。